

八、池田さんと箱根

1 箱 根

週末は転地して俗事を離れ、ゆっくり静養して心身の疲労をいやし、翌週の激務に備えるという慣行は、昔から行なわれていたようだ。しかしそのためには、特定であるか不特定であるかを問わず、静養先をもたなければならぬし、そのためには相当の出費がかさむことも当然予想される。従ってそれは、一般の庶民には手が届かないことであり、どちらかといえばやや貴族趣味のぎらいを拭い切れないものだ。悪くいえば一種のヴァニティといえないこともない。

ところが池田さんは、吉田内閣の蔵相時代から、いっこうに躊躇することなく、終始、週末静養を続けられた。これは一週間の緊張とそれに伴う疲労を解きほぐすためには、当然のことであると割り切っておられるようであった。池田さんが蔵相として吉田内閣に入閣したのは昭和二十

四年の一月であった。そのころ池田さんの五高の先輩で井上重喜というお医者さんが、中野で開業されていた。その人が箱根の仙石原にちよつとした別荘をもつておられ、池田さんはその別荘をそれから数年間、おそらくは無料で、借りられておつたようだ。

当時の仙石原はまだ淋しいところで、別荘と名のつくものはそう多くはなかった。それに宮の下から、早川の流れに沿い、宮城野を経由して芦ノ湖に上つて行く道は、曲りくねつておる上に石ころの多いひどい山道であつた。山の気候は変りやすい。時には寸尺をも弁じ難い濃霧に包まれることもあつて、この山道を上ることはそう容易な業ではなかつた。

それにしても箱根の空気は清澄で、山々の色彩も濃く、晴れた日には、ちよつと御殿場に通ずる乙女峠の真上に、富士がその艶麗な上半身を見せる。周囲は深林に包まれ、西方に拡がる樹海の彼方には、芦ノ湖の幽すいな湖面が横たわつておる。そのような景觀がたちまち濃密に閉ざされ、ひょうひょうたる風が遠慮なく吹きまくるかと思えば、暫くすると全く忘れたようなもとの静けさに遷る。井上別荘の客間には、井上さんと別荘であつた故岩村通世氏（元法相）の筆になる「空山不見人 但聞人語響 返景入深林 復照青苔上」という王維の詩が掲つておつた。池田さんは、この詩に示されておるような深林に包まれた静寂な別荘をこよなく愛しておられた。

井上博士は、昭和三十一年に物故されたので、いつまでも甘えて借用に及ぶわけにもいかなく

なった。そこで池田さんは、そのすぐ隣りの近藤別荘に移られた（持主の近藤荒樹氏の長男荒一郎君には池田さんの長女直子さんが嫁いでおられるのは周知のことである）。池田さんは、この別荘を自分のもののように愛玩され、大小様々の木や石を運びこまれたり、付近の山々を跋涉して持ちかえった木や苔を植えていった。池田さんの庭いじりのやまいは有名であるが、静養先においてますます昂じてこられたようだ。

2 静養中の池田さん

吉田茂氏（元総理）は、「わしは怠け者だから池田君のようにたくさん書類を抱えて箱根の山に上るようなことはしないのだ」とよくいわれたものだ。事実池田さんは、外交や経済に関する資料を、この別荘に持ち込むことを忘れなかつたし、持ち込むばかりでなくよくそれを読まれたのである。これは趣味からきたものか責任感からそうしたものか私には判らない。おそらくは両方であったと思う。吉田さんのように、静養中は俗界と完全に絶縁するという横着さを持合せていなかったようだ。

ところが、その池田さんが、静養中は秘書官以外の人とは原則として会わないという鉄則を在

官中貰かれたのである。例外として静養中の池田さんと清談を試みられたのは、小田原に隠棲中の松永安左工門翁と京都の大徳寺の和尚さんくらいのように思われる。私なども官房長官や外務大臣在任中、用務は原則として電話ですまし（たとえ私自身がその別荘と目と鼻の先にある観光ホテルに投宿中であつても）、別荘に出向いて面接することは避けたものである。池田さんを中心に集つておる財界人の会合、例えば末広会とか火曜会というような会合が、たまたま箱根で催されることがあつても、池田さんの方は下りてきて暫時参加されることはあつたが、別荘にその人達を招じ入れることはされなかつた。

池田さんのこの流儀は静養先ばかりでなく、程度の差こそあれ、官邸や私邸においても、一貫して貫かれておつたように思う。例えば政局の転換期が近付いてくると、御多聞に洩れず自薦他薦の人事問題が起つてくる。池田さんはそういう動きが余程気に入らなかつたようだ。元来、大蔵省の下僚時代から、上司の家を訪ねたり、権門の戸を叩くことを潔しとしない気骨の持主であつた。そこで荒木文相のように、愛想もよくないが、自分を訪ねてもこない人に無闇に惹かれていたようだ。このことが、政治家として得策であるかどうか、人間としていいか悪いか、一概にはいえないが、少なくとも池田さんという人は、そういう人であり、そういうことで通してきた人である。

また静養先に資料を持ち込んで勉強するのがよいか、そこでは俗事から完全に解放されて、自分をみつめるように心掛けるのがよいのか、これまた一概には割り切れないことのように思われる。少なくとも池田さんという人は、静養先ばかりでなく、日常坐臥、事実在即した資料を讀破し、苦吟を重ねる職人的な勉強に終始した人である。

箱根の仙石原は、年とともに開け、石ころの山道も広い舗道になり、ホテルや別荘もずいぶん建ち並ぶ盛況である。ゴルフ場も当初一つしかなかったものが四つにもなり、「ゴルフのメッカ」にするのだという地元の方々の意気込みも相当なものだ。これほど仙石原を愛した池田さんが、もはや現身でこの地を訪ねることができなくなったことは、なんとしても淋しい。